# 自閉の世界

玉井収介

# 自閉の世界

玉井収介 著

日本文化科学社

社会学研究室

**著者略歴**

玉井　収介（たまい　しゅうすけ）

1923年，岐阜県に生まれる。
1948年，東京大学文学部心理学科卒業。ただちに日本学園高校，同中学校において専任スクール・カウンセラーとなる。
1950年，東京家政大学助教授。
1952年，国立精神衛生研究所の創立とともに厚生技官，児童精神衛生部勤務。
1966年，同研究所が研修業務を開始するにあたって研修室長を併任。
1970年，東京学芸大学付属特殊教育研究施設に情緒障害児部門が新設されるにあたって同教授。
1971年，国立特殊教育総合研究所の創立とともに情緒障害教育研究部長となり現在に至る。この間，企画室長，付属教育相談施設長を併任する。
主著：「自閉症の実践教育」（編著，教育出版社，1974年），「遊戯療法の理論と実践」（教育出版，1976年），「障害児教育の今日的課題　第1巻　教育相談」（編著，福村出版，1976年），「発達心理学」（東山書房），「子どもの心――くせのなおし方――」（あすなろ書房，1975年）。

1976年5月25日初版発行　©
1976年7月25日2版発行
1977年2月10日3版発行

検印廃止

自閉の世界

著者　玉井　収介

印刷所　株式会社　K M S

発行所　株式会社　日本文化科学社
東京都文京区本駒込六―一五―一七
振替口座東京一―三八二八二
〒一一三　電話（946）三一三一

落丁・乱丁本はお取り替えします
本書の内容を無断で複製または転載すると著作権ならびに出版権の侵害になりますからご注意ください

1037-66360-6007
定価はカバーに表示してあります

# まえがき

自閉症ないし自閉的な子どもの最大の特徴は、人との関係、とくに感情的・情緒的な関係がもてないところにある。したがって関係をもつとすると、ひどく理くつっぽい関係になったりする。

とくに、知的な能力が低くなくて、自閉の傾向がつよいときにこの傾向はきわだってくる。しかし、知的な能力が高いといっても、それは現実の生活の中で役立つものではなくて、その子のひとりだけの世界の観念的なあそびの展開になったりする。言葉は全くないこともあるが、あっても独特のつかい方になったり、人に通じない新造語になったりする。

物ごとの順序や位置などに、ひどいこだわりをもっていることが多い。ある子どもは、くつ下が三足しかはけない。その子にとって、その三足以外はくつ下ではないのであろう。

この本では、わたくしが知っている十何人かの自閉的な子の、それらしいと思われる行動が観察されたときの行動と、一見奇妙にみえるその行動に対する解釈とを並べるという形をとった。そして、それを、

「感情のつながりのなさ、あるいはその回復の例」
「理くつだけの関係の例」
「ある種の知的能力の高さを示す例」
「こだわり、かたよった興味あるいは独特のルールの例」
「人あるいは生きているものへの認知の仕方の例」
「独特の言葉や文字の例」

という柱に分けてまとめてみた。もちろん、多少の無理のあることは承知している。

つまり、自閉症児の特徴といわれることをいくつかの柱にまとめ、それごとにA君の場合、B君の場合という具合に、具体的に観察された行動を記述し、その解釈をしたのである。

したがって、ひとりの子どもの話があちらにもこちらにも分散している。つまり、普通の事例研究の方法とは逆の試みをしてみた。こういう新しい試みで、「自閉」の子の世界が描き出せるかどうか、読者のご批判をいただきたいと思う。

昭和五一年四月

玉井　収介

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 目次

まえがき

I　自閉症あるいは自閉的とは

自閉症とは……2

II　感情のつながりのなさ、あるいはその回復の例

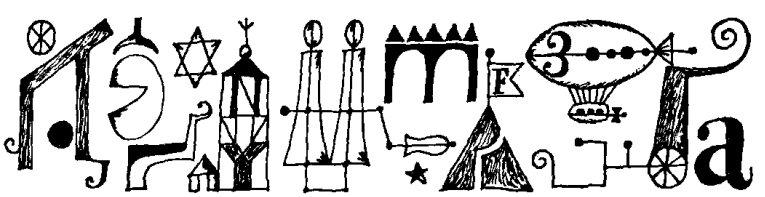
〈ある事実〉失礼とはずかしい……8

〈ある事実〉悲しみの数……10

〈ある観察〉「ゴメンナサイ」という言葉……13

〈ある観察〉紙芝居の話――「ヌク」！――……16

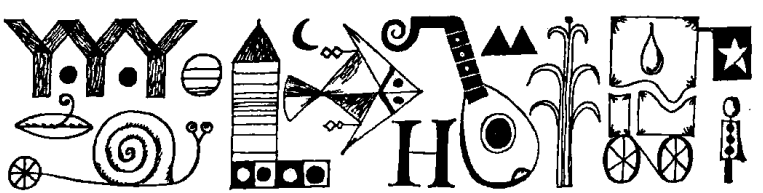
〈ある観察〉目の検査……18



〈ある観察〉ルールのあるケンカ……20
〈ある観察〉キャンプの話（A）――別れと再会――……22
〈ある観察〉キャンプの話（B）――人への記憶――……27
〈ある観察〉キャンプの話（C）――パニックから怒りへ――……32

## Ⅲ　理くつだけの関係の例

〈ある観察〉正確さとは何か――正確さの論理――……42
〈ある観察〉正確さの極限の話……45
〈ある観察〉アヤマレの話……48
〈ある観察〉電話でのケンカ……50
〈ある観察〉電気を消せ、消すな……53
〈ある観察〉地球をこわす……55
〈ある事実〉部分的に正しい論理――障子は紙だ――……59
〈ある事実〉まん中は半分ずつではない――統合のない論理――……61
〈ある観察〉自分にゴメンネ……65



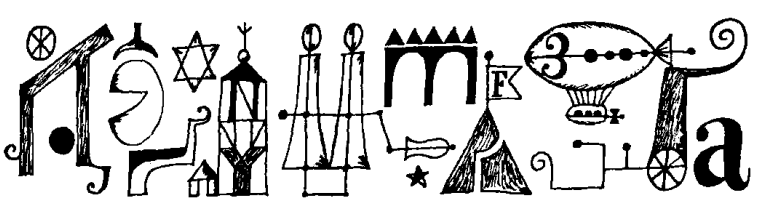
〈ある事実〉二〇〇ぐらいの痛さ……68
〈ある観察〉自分の中のゲーム……69

Ⅳ　ある種の知的能力の高さを示す例

〈ある事実〉N君の能力（A）――計算する力、マイナスがわかる――……74
〈ある事実〉N君の能力（B）――比較のおきかえ――……79
〈ある事実〉N君の能力（C）――創作――……81
〈ある事実〉正確とは何か――正確な図面――……93
〈ある事実〉クレーン現象……98

Ⅴ　こだわり、かたよった興味あるいは独特のルールの例

〈ある観察〉日記の話……102
〈ある事実〉言葉にならない対話……104
〈ある事実〉冷蔵庫と給食……114
〈ある観察〉電車の音の種類とゴミの車の話……117



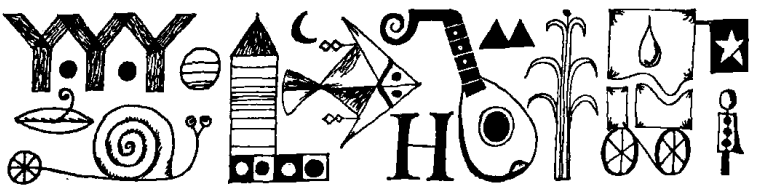
〈ある事実〉オート三輪車……121

## Ⅵ 人あるいは生きているものへの認知の仕方の例

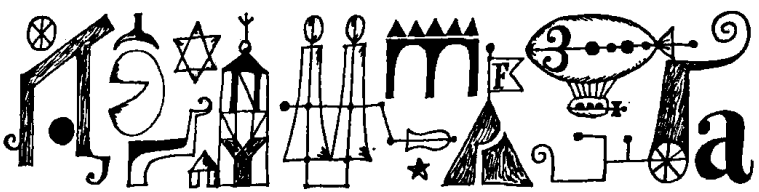
〈ある事実〉同じ方を向いてとるすもう……124
〈ある観察〉一匹の死んだ魚……126
〈ある事実〉場所がかわれば人もかわるか……128
〈ある事実〉動くお魚はなぜ生きていないのか……136
〈ある事実〉お人形はなぜミルクを飲まないのか……138
〈ある事実〉皆とわたし……141
〈ある事実〉妹のつくり方……147
〈ある事実〉音と声の話……150

## Ⅶ 独特の言葉や文字の例

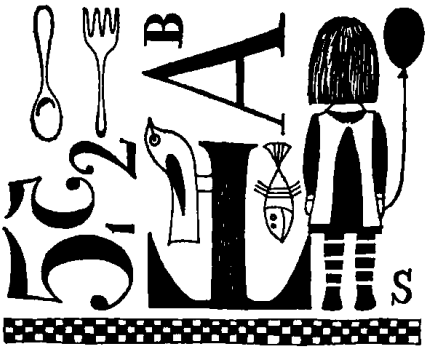
〈ある事実〉会話のない文字の話……154
〈ある事実〉言葉とは何か——デデデとガガガ——……165



〈ある事実〉人間がこぼれる……173
〈ある観察〉言葉でない文字……175
〈ある事実〉ローマ字で読む名まえ……177
〈ある観察〉〝話す〟よりも〝書く〟方がやさしい……179
〈ある観察〉触覚のおいしさ……181
〈ある事実〉「あつい」と「つめたい」は反対か同じか……185
〈ある事実〉ひとつの言葉のひろがり――「チー」――……190
〈ある観察〉「カ　ワ」……194
〈ある事実〉「ハンソク」の話……196
〈ある事実〉N君の創作文字……200



# I　自閉症あるいは自閉的とは




此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 自閉症とは

自閉症、あるいは自閉傾向の子どものことが最近注目されている。一体、どういう子どものことであろうか。

この子たちは、自分だけの世界に閉じこもって、人とコミュニケーションをもとうとしないことが特徴だといわれる。

その原因はわからない。

ある人はこれを病気だと考え、ある人はこれを性格のかたよりだと考えた。そういう論議が長い間つづいた。その論議の歴史を、ここでくりかえそうとは思わない。それについては、本書の巻末に紹介した参考文献等を参照されたい。

自閉的な子どもは、しばしば目があわないといわれる。向かいあったとき、視線があうのでもなければ、避けるのでもないのである。避けるというのは、マイナスの関係があるということである。関係がないのだから避けもしない。向かいあったまま、あわないのである。

コミュニケーションをもたないのであるから言葉は必要ない。だから発達しない。全く言語

のない子もいる。発達しても他人に通じる必要がないから、他人と同じ使い方をしない。独特の使い方になったり、新造語になったりする。また、ものごとの位置や順序や場所などに非常につよいこだわりをもっていることが多い。歩く道路や、みるテレビの番組や、お弁当のおかずなどがきまっていたりする。

ある子どもは、横断歩道のサイドラインの所ばかり歩いていた。これなどは次のように解釈できよう。

彼は、自動車が危険だ、などということは全く考えない。だから、どこからでも好きな所からとび出そうとする。すると、大人は危いといってとめる。何回かそれをくりかえした末、横断歩道までくる。そして大人は、

「ここならいい」

と渡らせる。

このとき大人は、何メートルかの幅をもった横断歩道を考えている。そして、その間ならどこでも同じだと考える。

しかし、彼にはそれはわからない。それ以外の所が渡っていけなかったこともわからなかったのと同じく、横断歩道の意味もわからない。わかったのは、そのサイドラインの所で渡らせてくれたことだけである。

したがって、そこだけ歩くことになる。そこだけが大人と彼の妥協できたところになるわけである。しかし、これを大人からみていれば、それは、これだけの幅があるのに何でこの線ばかり歩くのかというこだわりになるのである。

わたくしが親しくしているある若い女性が、外国へひとり旅をしてきた。それも英語で通じる所ではない。

「こんなことしてこなかったか」ときいたら、「そのとおりしてきた」という。

言葉が通じない。習慣もちがう。レストランに入ってもメニューがわからない。身ぶり手まねを交えて交渉した末、やっとひとつだけ通じたとする。かりに、それがチャーハンだったとしよう。

するともう面倒くさくなる。朝も昼もチャーハンである。きょうもあしたもチャーハンである。そこだけが安全に渡れる横断歩道のエンドラインになるわけである。

向こうの言葉がわかり、メニューがみな読める人がみたら、つまり、横断歩道の意味のわかる人からいえば、

「彼は、チャーハンに異常なこだわりをもっている」

ということになるのではないだろうか。

わたくしが、子どもの問題の相談という仕事に入ってから、いつのまにか二〇年以上の年月がたってしまった。その間に、かなりの数のこのような子どもに接してきた。

そして、この子たちの一見奇異にみえる行動を何とか理解できないかといろいろ考えてみた。そして、ときにはこの子たちが示す行動は、順調な発達をしている子どもではあたり前のこととして通りすぎてしまう現象を、あたかもスロー・ビデオのごとくゆっくり拡大して示しているのではないかと考えることがあった。そして、それがだんだん多くなった。

この本は、そのようないくつかの例を集めたものである。いわゆる事例研究という形はとらずに、ある具体的な観察された行動とそれに対する解釈を並べて書く、という形をとった。このように、具体的なエピソードをつらねる方が、この子たちの世界をうきぼりにできるのではないかと考えたからである。

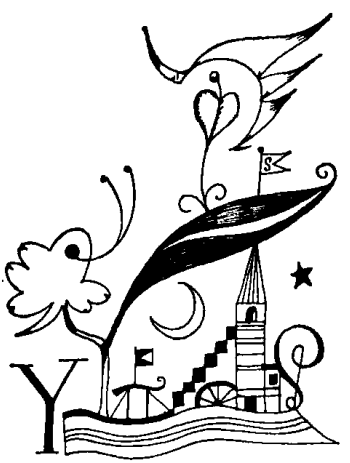
わたくしは、またこの子たちは「ウソをつかない子」だと思う。「つかない」というより「つけない」のだ。ということは、この子たちの行動に矛盾はないということである。よく注意して解釈すれば、その子なりの一貫性はあるのである。ただ、そのルールがまわりの人間に理解されにくいのである。

ただ、「自分ひとりの世界に閉じこもって、まわりの人と関係をもとうとしない」という表現は、誤解を招くこともある。こういう表現なら、「引込思案の子」もあてはまるからである。

「かんもく」といわれる子だって該当する。引込思案やかんもくまで自閉の中に入れてしまったら、この子たちの本当の特徴はわからなくなってしまうであろう。

「引込思案」や「かんもく」（ある場所では普通に話ができるのに、ある所に出ると全く黙ってしまう）の子は、いってみれば、前述の目があったとき避けるという方にあたるであろう。「自閉」的といわれる子の世界は、もっともっと遠い所にあるのである。

# II 感情のつながりのなさ、あるいはその回復の例



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com